

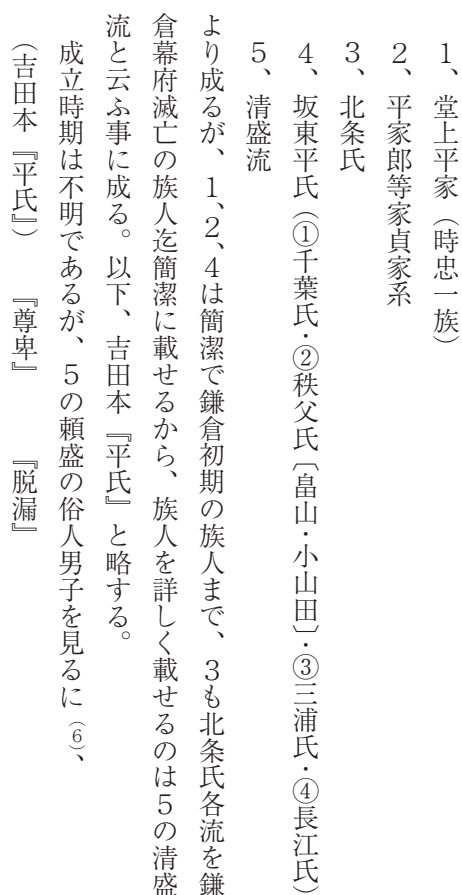
『生活文化研究所報告』第四十九号
二〇二二年三月刊 別刷

架空平家一門伝

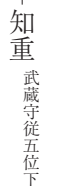
佐々木 紀一

一、兼盛

然るにその後、兼盛を掲載する他の系図に気付いた。天理大学図書館吉田文庫蔵『平氏系図』一帖四紙（吉六二一十八）で、『吉田文庫神道書目録』によれば近世初期写とある。法量は、竪二四・三糎で本文一筆。同系図は、



佐々木紀一



とあり、為盛と光盛の脇書の混乱を見るに、先行系図が存在し、それを崩してゐる事が分かる（加賀守・兵衛佐は為盛の脇書）。また5の宗盛子の、

(吉田本『平氏』)

『尊卑』

『脱漏』

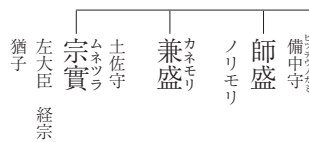
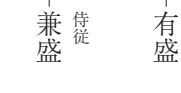
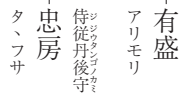
從五下
ヨシムネ
能宗
カウス
フクシヤウグント
号二副將一八歳若公
サイノワカキミ

正五下
能宗
号自害大夫

能宗
從五位上
号自在大夫

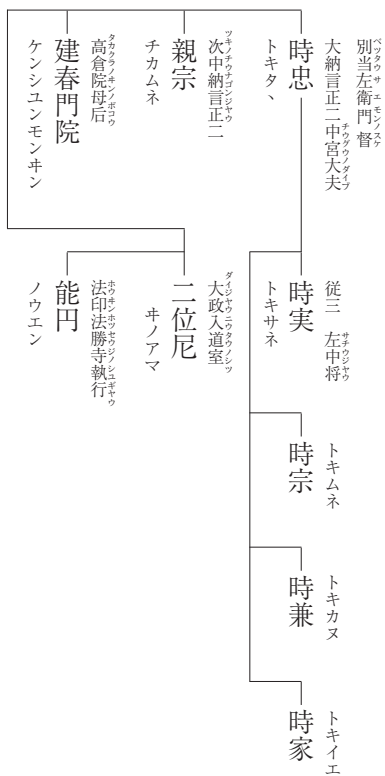
と脇書があるが、宗盛子の副将は「内府子息六歳童形〔字副将丸〕」〔7〕と見え、『平家』一部諸本では五歳とする伝本がある〔8〕。対して長門本を含め八歳とする『平家』諸本の記載は、母の宗盛北方（時信女子）の没年に合せて改変したとする見解がある訳だが〔9〕、吉田本『平氏』は端的に『平家』を参照してゐる可能性を指摘出来よう。同様5の基盛の「安芸判官」〔ハングラン判官〕は、同人の極官に基づくものではなく、保元の乱当時の呼称「安芸判官基盛」を持つ『盛衰記』卷三十二「行盛定家卿二歌ヲ托ス事」・「保元物語」上「官軍方々手分事」〔10〕の影響を受けるか。

(吉田本『平氏』) (文禄本系図)

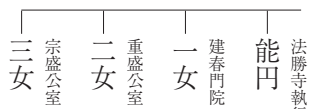
『須磨寺之笛之遺記』
(11)

とある。文禄本系図では忠房が無く、本箇所では両系図の関係が明確ではないが、1を見るに、

(吉田本『平氏』)

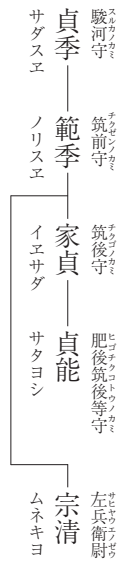


(文禄本系図)

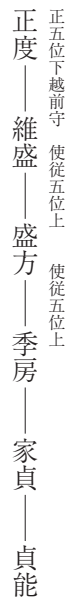


とあり、藤原顕憲の子で、時子・時忠の異父弟能円⁽¹²⁾を平時信子に位置づける特殊な点で共通するが、その他の記載人物・方法では異なる。また2の平家郎等の家貞家系であるが、

(吉田本『平氏』)



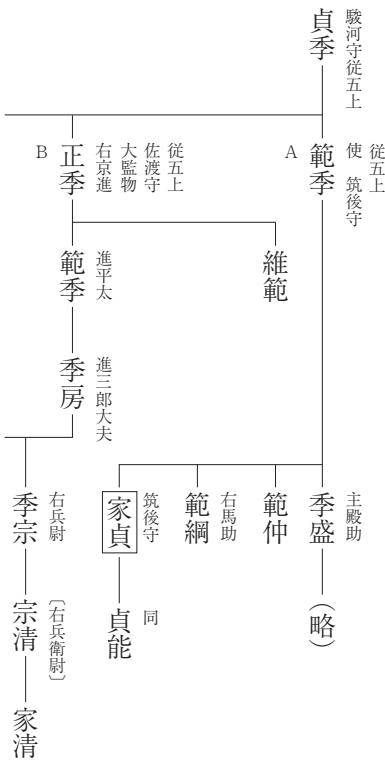
(文禄本系図) (形態を変へてゐる)



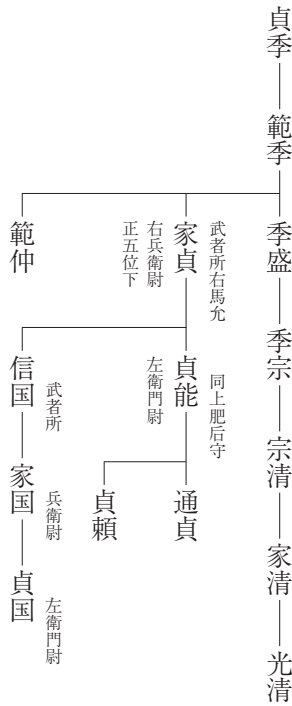
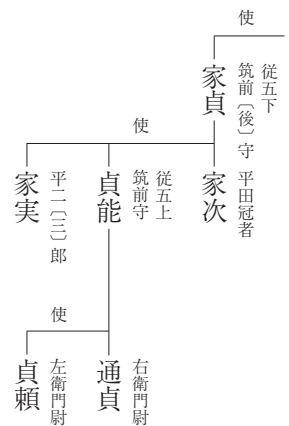
とあり、文禄本系図の承接には誤りがあるが、端的に家貞迄、両者一致しない事が分かる。目下、両系図間に直接の交渉は無いと考へるものである。

また『盛衰記』巻一「五節夜闇討」は家貞の家系について、I「進三郎大夫季房子」・II「木工右馬允貞光孫」とするから吉田本『平氏』に一致しない。長門本・文禄本・中院本⁽¹³⁾は『盛衰記』に同じで、それ以外の現存『平家』はIのみの言及で(延慶本・四部合戦状本・『源平闘諍録』・南都本・『平家打聞』巻五「貞能」)⁽¹⁴⁾とも一致しない。

寧ろ大系本『尊卑』では、A範季流とB正季流の二箇所に掲出されるが、



そのA範季流に近い事に成る。然るに『古系図集』・中条本には、A範季流家貞が無く、菊亭本『尊卑』・『脱漏』「平氏系図」では、囲みの家貞に「イ」(菊亭本『尊卑』・「異本」(『脱漏』)の標記がある。また妙本寺本にはBの正季流がなく、

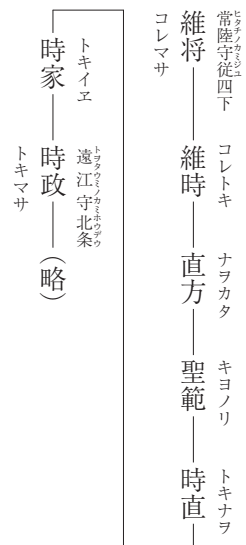


とA範季流であるが、吉田本『平氏』と一致しない。これからすると現在見る『尊卑』はA範季流の家貞を後補したものだらう。

二、吉田本の性格及び『須磨寺之笛之遺記』依拠の系図

依然、吉田本『平氏』の成立、特に『盛衰記』との関係が問題である。諸系図で異同が大きい、3の北条時政に至る歴代を見るに、

(吉田本『平氏』)

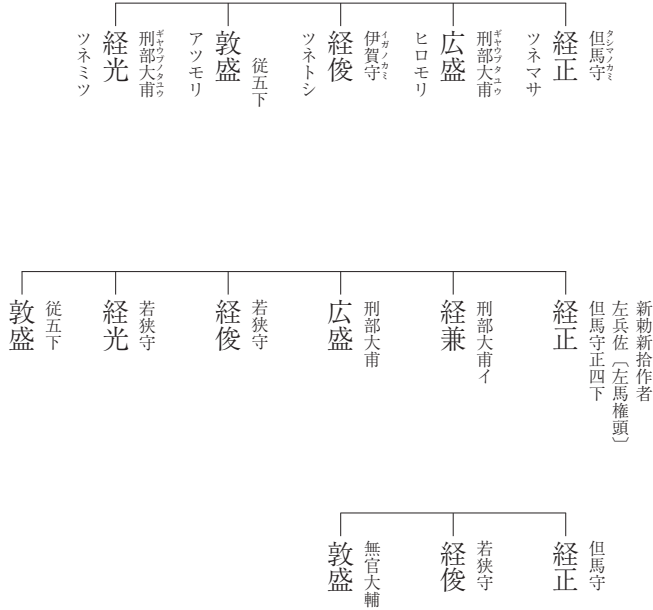


とある。『古系図集』・『尊卑』・野津本『北条系図』⁽¹⁵⁾では時家・時政の間に、時方が入る事以外は吉田本『平氏』に同じである⁽¹⁶⁾。また5の経盛流で、

(吉田本『平氏』)

『尊卑』

『須磨』



と、広盛・経光を共に持つのは『尊卑』・『脱漏』である⁽¹⁷⁾。広盛は『盛衰記』・四部本にも登場するが、経俊の伊賀守任官は史実であるものの⁽¹⁸⁾、『平

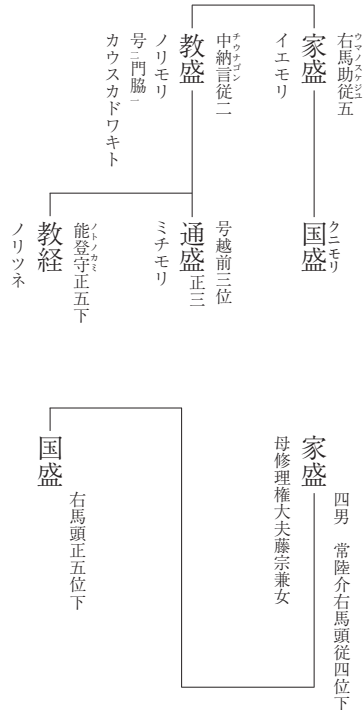
家』には「若狭守」としか見えない。

更に前掲の5の頼盛流で、知重を持つのは『尊卑』・『脱漏』・妙本寺本・板本『源平系図』であるから、吉田本『平氏』は比較的『尊卑』・『脱漏』に近い所が有る事になる。

また先に『盛衰記』卷三十八「平家頸懸獄門」の一の谷の戦死者の交名にのみ見える「前備前守国盛」について、その官途を辿ったが⁽¹⁹⁾、吉田本『平氏』と『脱漏』では、共に国盛を家盛子とする点で共通する(『脱漏』に近い菊亭本『尊卑』にはなし)。同時に教盛子の教経までを挙げれば、

(吉田本『平氏』)

『脱漏』



となる。然るに『須磨』にも「家盛の息には、備前守国盛」と見える。同書は『盛衰記』を利用するが⁽²⁰⁾、冒頭の平家一門の系譜は何らかの系図に拠ったと推定される。即ち、

(『須磨』) 忠盛に子息あまたあり、太政大臣清盛公(但是白河院の胤也云々)、修理大夫経盛、門脇の中納言教盛、從四位家盛、池の大納言頼盛、薩磨守忠度、法勝寺の執行能円也(『小枝』同)

(『盛衰記』) 忠盛朝臣子息アマタ有キ、嫡子清盛、二男経盛、三男教盛、四男家盛、五男頼盛、六男忠重、七男忠度、以上七人(卷一「忠雅播磨米」)

– 5 –

とある事を見るに、母の願ひと裏腹に元服する事は無かつた事になる。『平家』諸本には見えないが、『尊卑』・妙本寺本・板本『源平系図』に法諱「妙覚」とあり、諸書により時期が異なるが、「六代禪師」(24)・「六代房」(25)とあり、出家してゐた事が分かる。

『大日本史料』四之五、建久九年二月五日条にも引用されるのが、大隅の欄寝氏の家譜『新編 欄寝氏正統系譜』で、

高清

(略)

建仁三年十一月廿七日、於ニテ関東田越川ニ、被^レル^ル誅^セ、年三十、法

名良潮(26)

とあり、『参考源平盛衰記』(27)に紹介されるが、同氏の本姓は建部氏で(28)、仮冒であるとするべきである(29)。

六代の刑死時期が現存史料と異なるのだが、一武家の仮冒の例であるとするれば、それ以上の考察は不要であらうが、『平家物語』の平家一門を花に比した『平家人物論』の『墨海山筆』別集卷八所収本(30)にも、

六代

御母新大納言女中御門成親卿
高清

と見え、松尾葦江氏の諸本校異によれば、神宮文庫蔵『平家人物論』も高清を持つ(31)。一方、蓬左文庫本(32)・慶応大本・貞享三年板本(33)・穎原本(34)にはなく、松尾氏校異では彰考館本・刈谷本(35)、更には静嘉堂文庫本(36)にも高清が無いから、天保十四年西田直養筆写の本奥書を持つ墨海山筆本が後補で、元禄二年成立の『参考源平盛衰記』の利用の可能性がある。しかし「高清」は欄寝氏の創作ではない。『武家年代記』中巻の建仁三年条にも、

十一廿七頼家誅平高清六代事也(増補続史料大成)

と同説が見え、同書に他に欄寝氏との関係は見えないからである。

これも書き入れ段階は不明だが、大東急記念文庫蔵慶長十七年写の松雲

本『平家』巻末の系図(37)に、

六代

高清

三位中将

惟盛 熊野那智浦

入水廿七

とあり、同系図の書入れに、

讃岐守正盛子・備前守忠盛子

太政大臣清盛子・小松内大臣重盛

子・三位中将惟盛子・六代高清

清盛祖父正盛ヨリ 高清マテ六代

とあり、本文(巻九「惟盛出家」)の書入れにも、

「在新中将資盛所

抑唐革^ト云^レ鎧、小烏^ト云^レ太刀ハ平將軍貞盛ヨリ 当家ニ伝テ維盛マテハ嫡々

「高清

ニ九代ニ相当ル、若シ不思議ニ世モ立直タラハ、六代ニ賜ヘシト申セト

コソ宣ケレ

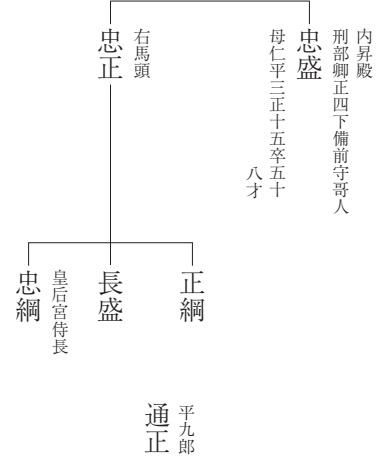
と、高清が見える。巻末の系図部分は、菊亭本『系図略』等(38)に同じであるから、この書入れは後補と見るものであるが、慶長十七年(一六二二)には成立してゐた事になる。

また室町後期成立の(39)、東大史料編纂所蔵『皇代記』並御系図『土御門紀(建暦)に、

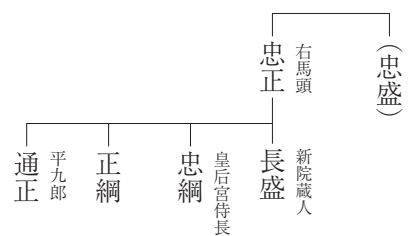
同三年三月廿七日頼家誅平高清、平家嫡男惟盛卿息号六代是也、文覚為資時ハ云三位禪師妙覚(電子公開)

と、月が異なるものの、同じ記事が前半にある。同記には文覚中興の神護寺関係の記事が多いが、これも詳細不明である。建仁三年の刑死と言ひ、元服と言ひ、不審点が多いが、室町時代末期には、俗人高清説が流布してゐた事が確認できた。六代生存説(40)との関係も不明で、その成立事情は後考を俟ちたい。

(菊亭本『系図略』)



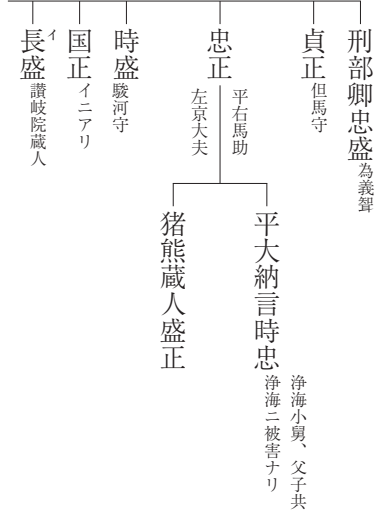
(徳大寺本)



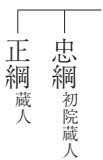
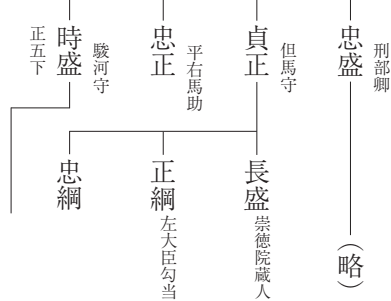
と、菊亭本『系図略』が通正を別な位置に置く。

これは何らかの事情で『尊卑』が通正を問題の位置に折り込んで写し、菊亭本『系図略』もそれを踏襲したと説明可能である。しかし『尊卑』が『保元』の影響を受けてゐる可能性がないだろうか。何故ならば通正を持たない中世成立系図がある。妙本寺本は複数系図が取り合はされてゐるが、掲載順に甲乙とすると、

(甲部)

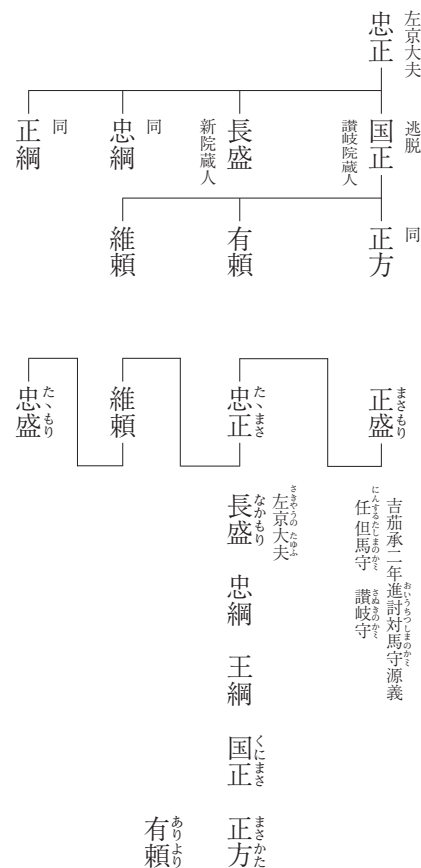


(乙部)



とある。また拙稿に紹介したが、延慶本系図・上杉本『平家けいつ』・板本『源平系図』、『塵荊鈔』九「平氏之事」(後掲)では、国正が載るが、通正が見えない(拙稿②・④)。

(延慶本系図)



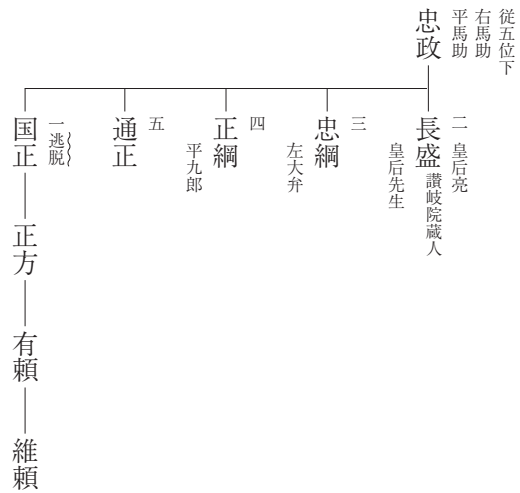
更に吉田本『平家系図』は、『平家』を利用する系図で、同系統に書陵部本(50)、恩頼堂本(51)、呆犬齋本(52)があるが、そこには忠正子孫の記載が無い。故に吉田本『平家系図』の増補による混入と思はれるが、忠正の官の「左京大夫」との一致を見るに、延慶本『平家』系図に近い(53)。国正以下を載せる系図には、

『塵荊鈔』九「平氏之事」

次男因幡守忠正也、此忠正ハ保元ノ乱ノ時、源為義ニ同心シテ、後白河院大内ヲ攻奉リ、軍兵敗北ノ後、害ニ逢玉フ、其子国正、長盛、維頼、忠綱、正綱等也

や、

『指宿文書』三〇「平姓指宿氏系図」(54)



とあり、『塵荊鈔』では忠正の官名が一致しない。一方の「平姓指宿氏系図」は前掲の菊亭本『系図略』と同系であるが、独自に国正流を増補し、その波線部は延慶本系図と一致してをり、近縁性を指摘したが(拙稿④)、新たに吉田本『平家系図』からも、共通先行系図の存在を窺ふ事が出来るのである。

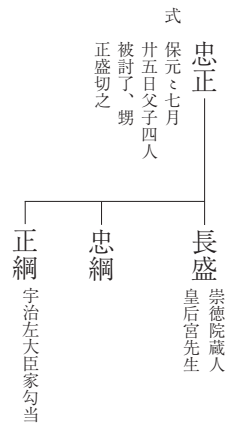
さて次に忠綱は前掲『兵範記』・『帝王編年記』には「左大臣家勾当」とあるのに対し⁽⁵⁵⁾、『保元』半井本・流布本では、忠綱は「皇后宮侍長」とあり、正綱の「左大臣勾当」共に、『尊卑』に一致する。これからすると『尊卑』の通正は同系『保元』より補入された人物ではないか。

しかも『保元物語』に於いても後の補入の可能性を指摘出来る。竜門本では、

にじゅう五日に源平をはしめとして七人かかうへをはねらる、(中略)平うまの介た、まさ、しんぬんくらんとなかもり、くはうこくうしちやうた、つな、さ大しんまさつな四人をは、はりまのかミきよもりう

け玉て、六条かはらにてこれをきる
とあり、忠正子の呼称は半井本・鎌倉本・流布本に近いのだが、父子四人とある。

これが竜門本の独自の改変でない事は、入来院本『平氏系図』にも、



と「父子四人」とあり、刑死の日を史実と異なる二十五日⁽⁵⁶⁾とする事から、『保元』に拠った記事であると考へられ、竜門本同様の『保元』が存在したと推測出来るからである。

勿論、現存『保元』に通正後補の過程を窺はせる徴証は無く、前掲の如き中世系図により、通正を除いた、寧ろ後出の『保元』である可能性を完全否定出来るものではない。しかし『兵範記』に見える如き刑死者の五人目の存在を承けて、『保元』で通正が創作された可能性、特に、今一人の郎等道行を忠正子と解し、片諱を「正」に変へた可能性が考慮される。忠正子の通正は架空の人物と推定する。

注

- (1) 「桓武平氏正盛流系図補輯(上)」(『国語国文』六十四ノ十二、平成七年十二月)・「同(下)」(『同』六十五ノ一、平成八年一月)、以下、拙稿①とする。
- (2) 「平家系図雑考」(『米沢史学』十九、平成十五年十月)、以下、拙稿②とする。
- (3) 本稿で参照した平家系図は以下の通り。

ア、『古系図集』（東大史料編纂所蔵。電子公開）。書陵部所蔵の壬生本『諸家系図』（電子公開）、京都大学附属図書館蔵平松本『平松家系図』（請求記号二一ヒ一三。電子公開）も参照。

イ、『帝皇系図』（尊経閣文庫蔵。紙焼写真による。）

ウ、『尊卑分脈』（大系本・京都大学附属図書館蔵菊亭本〔紙焼写真、以下、菊亭本『尊卑』〕）

エ、延慶本『平家物語』巻頭系図（汲古書院刊影印）。以下、延慶本系図。オ、『野辺文書』所収各種平氏系図（都城市文化財調査報告書三〇『野辺・東條家古文書』）、以下、『野辺』とし、各系図の番号と名称を挙げる。

カ、入来院本『平氏系図』（山口隼正氏「入来院所蔵平氏系図について（上）」〔長崎大学教育学部社会科学論叢〕六〇、平成十四年三月）、以下、入来院本。

キ、妙本寺本『平家系図』（『千葉県歴史資料編 中世三（県内文書二）』の翻刻）。以下、妙本寺本。

ク、正宗寺蔵『諸家系図』（東大史料編纂所蔵謄写本）、以下、正宗寺本。ケ、続群書類従『尊卑分脈脱漏』（内閣文庫蔵写本）、以下、『脱漏』。

(4) 勉強社の慶長古活字本の影印により、蓬左本を参照（汲古書院の影印）。

(5) 日本古典文学会の影印による。以下、文禄本系図と略す。

(6) 菊亭本『尊卑』の脇書は『脱漏』に一致する。

(7) 『吾妻鏡』文治元年四月十一日条（新訂増補国史大系）

(8) 延慶本六末「大臣殿若君ニ見参之事」・四部本イ表記（汲古書院）。

(9) 角田文衛氏『平家後抄』第三章「平孫狩り」（昭和五十三年九月）・武久堅氏『平家物語の全体像』三「大臣殿物語」の主人公・宗盛伝承の様式と平家物語の構想」（平成八年八月、初出昭和六十一年）・佐伯真一氏「副将の年齢とその母」（水原一氏編『延慶本平家物語考証

一』所収〔平成六年五月〕。

(10) 半井本（内閣本の電子公開）・鎌倉本（汲古書院の影印）・京図本（電子公開）・宝徳本（陽明叢書）・流布本（筑波大所蔵古活字本）同。

(11) 冒頭の系譜部を系図化した。後藤康宏氏「須磨寺笛之遺記」と『小枝の笛物語』をめぐって」（『伝承文学研究』三十一、昭和六十年五月）の翻刻による。以下、『須磨』と略。同系の『小枝の笛物語』（『室町時代物語大成』五）をも参照（『小枝』と略）。

(12) 『山槐記』治承三年四月二十三日条（新訂増補史料大成）。

(13) 但し文禄本・中院本はⅡ傍線を「木工助」とする。長門本は福武書店刊本、中院本は三弥井書店の翻刻に拠る。

(14) 『源平闘諍録』は汲古書院の影印、『平家打聞』は島原松平本の電子公開に拠る。

(15) 田中稔氏「史料紹介 野津本『北条系図 大友系図』（『国立歴史民俗博物館研究報告』五、昭和六十年三月）

(16) 『須磨』では「維衡の弟を阿多知四郎時範と名く、北条四郎時政か五代の祖なり」として異なる。『小枝』は傍線を「あた」とする。

(17) 『古系図集』は広盛の前名の経兼のみ（拙稿①）。

(18) 『玉葉』治承二年正月二十八日条・陽明文庫蔵『勘例』「同輩雖非成業超上臈任受領例」（紙焼写真）

(19) 拙稿「桓武平氏正盛流系図補輯之裏成」（『米沢史学』二十二、平成十八年三月）。以下、拙稿③とする。猶、書陵部蔵『蓮華王院供養部類記』所引の以下の古記録を見るに、

太上天王法住寺辺建立千鉢堂供養^{三十五間}、備前守平国盛造進之（右兵衛督平重盛沙汰之）（『外記』長寛二年十二月十七日条）

とあり、

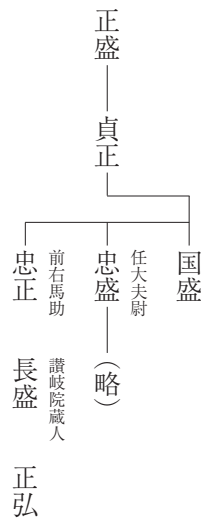
正三位平重盛、造国司国盛讓、造国司可為重儀^{任職}并連任^遷云々（『長方卿記』同日条）

また、

伝聞 勸賞 正三位平重盛（造国司国盛賞讓、件国盛猶子也）（中略）

造国司「可為重任并遷任功備前守」（『山槐記』同日条）

と見えるので補なひたい。また内閣文庫蔵『平家系図』一軸に、



とあるが、これは後述する国正の可能性があるか。

- (20) 前掲後藤康宏氏論参照。『須磨』の「一谷西の城戸口の大將軍ハ、薩摩守忠度・備前守国盛」とあるのは『盛衰記』を敷衍したか。

- (21) 維後は『兵範記』仁安元年十月十日条・『葉黄記』寛元四年四月十六日条所引「仁安元年例文」（史料纂集）に実在確認。盛縁については拙稿③参照。系図では『尊卑』・妙本寺本・『塵荊鈔』巻九「平氏之事」（古典文庫）に見える。

- (22) 拙稿「桓武平氏正盛流系図補輯之刎殻」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四十三、平成二十八年三月）参照。以下、拙稿④とする。

- (23) 『尊卑』では信国子に釣り、「時忠卿為子」とする。『公卿補任』天福元年同人条も同（新訂増補国史大系）。

- (24) 『吾妻鏡』建久五年四月二十一日条。

- (25) 『鎌倉年代記裏書』建久九年二月五日条（増補続史料大成）。

- (26) 東大史料編纂所蔵（電子公開）。『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ一』所収『欄寝文書』「平氏欄寝家系図」が同じ。『諸家系図文書』二「欄寝家系図」には「建仁三年三十二テ」とある（『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 伊地知季安著作集 三』）。

- (27) 卷四十七に「欄寝氏家譜」として引く（水原一氏編『新訂源平盛衰記』による）。

- (28) 『桑幡家文書』一二「大隅国図田帳」（建久八年六月、『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家分け十』・『欄寝氏正統世録系譜』九「大隅国留守所下文」（建保五年十一月）・『同』十「欄寝清重讓状」（承久三年三月、『同前 家分け一』）。

- (29) 角田文衛氏『平家後抄』第八章「おどろの路」

- (30) 東大史料編纂所謄写本の電子公開による。

- (31) 松尾葦江氏の『平家物語論究』第四章五「平家人物論」の基礎的研究」（昭和六十年三月）。以下、松尾氏校異とする。

- (32) 渥美かをる氏「平家花揃（蓬左文庫本）翻刻」（『説林』十三、昭和三十八年十二月）

- (33) とともに『室町時代物語大成』第十二巻所収。

- (34) 榊原千鶴氏「京都大学頼原文庫蔵『平家花揃』（『名古屋大学国語国文学』七十九、平成八年十二月）による。

- (35) とともに松尾氏校異による。

- (36) 外題『伊勢平氏系図』一冊。内題・奥書なし。近世後期写か。系図形式。

- (37) 『大東急記念文庫所蔵 古写古版物語文学総瞰 軍記物語 五三 平家物語（四）』による。

- (38) 京都大学附属図書館蔵写本。同系統として東京大学史料編纂所徳大寺本『諸氏系図』（徳大寺本と略）、京都歴史館蔵東坊城本（『京都府立総合資料館目録』に、『新編纂図本朝尊卑分脈系譜雑類要集』三冊（二四九）とある写本）、『新版大系図』四（架蔵本）・内閣文庫蔵『葦名系図』（電子公開）・『諸家系図纂』十一上「平氏」（忠正親子なし。内閣文庫の電子公開）がある。

- (39) 拙稿「室町後期写清和源氏系図について」（『山形県立米沢女子短期

大学附属生活文化研究所研究報告』四十四、平成二十九年三月）参照。

- (40) 『塵荊鈔』九「平氏之事」、『諸家系図纂』「平氏」には「号三位禪師、法名妙光、於紀州山東莊鳶巢城十九歳ニシテ戦死」（内閣文庫蔵。続群書類従「桓武平氏系図」が同）に刑死以外の説が見えるが、伝説の域を出ない。

- (41) 鎌倉本ほぼ同だが、傍線は「侍」。流布本系の古活字本も同。内閣(二)本は「傳長」を「もちなか」とする(電子公開)。

- (42) 金刀比羅本(日本古典文学大系)・陽明本甲(陽明叢書)・九条本(日本古典文学影印叢刊)・東大国語本(東京大学国語研究室資料叢書)・九大本(在九州国文資料叢書)・学習院国文本(電子公開)・京師本・杉原本(共に古典研究会)・内閣(一)本(電子公開)同。

- (43) 班山本・根津本・竜大本は電子公開。蓬左本は近藤政美氏他校註本の翻刻、早大本は早稲田大学蔵資料影印叢書『軍記物語集』による。

- (44) 陽明叢書『人車記』の影印による。

- (45) 国会図書館本も同配置(但し「道正」で、「保元乱ニ父子五人被誅了」と朱書(電子公開))。

- (46) 国立歴史民俗博物館蔵一冊。紙焼写真による。

- (47) 天理大学図書館吉田文庫蔵。紙焼写真による。

- (48) 宮内庁書陵部蔵。紙焼写真による。

- (49) 天理大学図書館吉田文庫蔵(六二一一九)近世初期写、折本一帖五紙。

- (50) 壬生本『源平系図』一卷(四一五・二二三)。電子公開による。

- (51) 四天王寺国際仏教大学図書館蔵『源平系図』。近世写一卷。

- (52) 外題『源平系図』。近世中期写一卷。

- (53) 『野辺』二〇「平氏系図」は断簡で当該部を脱落。

- (54) 『鹿兒島県史料 旧記雜録拾遺 家わけ十』所収。

- (55) 『兵範記』久寿元年四月十四日条・『台記』同十一月十六日条(史料

大成)に確認。

- (56) 半井本・鎌倉本・竜門本・古活字本同。